

# 東北ヘルプ ニュースレター

2024年 イースター号



キリストさんと出会う旅・東北クリシタンツアー

～ツアーのご提案

2～4頁



ツアー報告

～宗教の衝突を乗り越える300年 & キリストさんの二つの現場を辿る旅

5～6頁



「キリストさん」に出会う その1

～秋山牧師・中澤牧師と一緒に、被災地の新しい障がい児者施設を訪問する

7～12頁



クリシタン遺跡を巡って

東北ヘルプ理事 秋山善久（日本同盟基督教団仙台のぞみ教会牧師）

13～14頁



「キリストさん」に出会う その2

～中澤牧師と一緒に、能登支援に向かう被災地の社会福祉協議会を訪問する

15～21頁



クリシタン殉教地に立って

東北ヘルプ理事 中澤竜生（基督聖協団仙台宣教センター 宣教師）

22～24頁



繋げること・繋がること

～風化に抗うために・郷内宣子さんインタビュー

24～28頁



「ファミリーツリー」を観て

初めて観劇したBさん

29頁



元「原発強制避難地」を訪ねて

～大熊町・葛尾村・川内村 訪問

30～43頁



能登支援報告

地域支援ネット「架け橋」 中澤竜生・中澤佳子（基督聖協団仙台宣教センター）

44～45頁

会計報告

46頁



# キリストさんと出会う旅～東北キリシタン・ツアー

## ツアーのご提案

東北ヘルプ代表 川上直哉

2014年、東北ヘルプは「東北キリシタン」の研究・発掘を始めました。それは、被災地の交流人口を維持増加させるための努力でした。

「3.11」の被災地は、広域にわたる少子高齢過疎の地です。少子高齢過疎の地ですから、そこにボランティアが訪れること、あるいは「視察」の方々が来てくださることが、地域をとっても元気にしたのです。その様子を現場で見て、風化への対策は「交流人口」にあるのだと、実感したことでした。

しかし「津波」と「原発事故」の現場だけでは、交流人口を維持することはできない。どんなに巨大な災害であっても、風化します。復興を期するなら、なんとかして、風化に抗わなければならない。それは、震災発生から程ない頃すでに、はっきりと痛感させられたことでした。時間と共に、人々の記憶は薄れ、関心も無くなって行く。切ないことです。しかし、それは現実でした。

そこで、私たちは「歴史」を掘り起こすことにしました。過去にも、「3.11」のような苦労があった。しかし、それを東北の人々は乗り越えてきた。その足跡をたどり、そこにある教訓を拾いながら、「3.11」を見直してみる。そうしたら、訪れた人々それぞれの未来が、見えてくるかもしれない。

そうして掘り起こした歴史を現代につないで生まれたのが「キリストさんと出会う旅～東北キリシタン・ツアー」でした。ツアーは2015年から始まり、「コロナ」の騒動でいったん休止をして、昨年、また開始したのでした。

### 『東北キリシタン探訪』

仙台白百合女子大学カトリック研究所 編  
教友社◎定価 2,200円(税別) ISBN 978-4-911258-03-3



キリシタンが命を賭してまで守りたかったものとは？  
禁教下を生き抜いた東北キリシタンの真実の姿に迫る。  
現代世界に響く悔いと希望のメッセージ。

歴史学、女性史学、郷土史研究、博物学、文学、教育学、神学の協働が東北で結実。  
マクロとミクロの視点から描き出すキリシタンの実像—珠玉の講演・論考10編を収録

**第I部 キリシタン再発見**  
潜伏キリシタンが問いかけるもの▷高祖敏明/キリスト教の伝来と  
戦国日本▷平川新/日本のキリスト教受容の諸相をふりかえって▷  
川村信三/生誕百年の遠藤周作『侍』と東北キリシタン▷山根道公

**第II部 東北に息づくキリシタンの足跡**  
地域の人々の活動に生きる隠れキリシタン▷高橋陽子/光へ続いている道▷高橋陽子/「米川新聞」からみえるキリシタンと地域社会▷  
佐藤和賀子/福島の子キリシタン▷佐藤芳哉/物語の中の慶長遣欧  
使節▷川上直哉/カトリック教会における殉教の意義▷加藤美紀

お求めは、書店または Amazon 等で購入できます。

10年間の集大成として、2024年3月25日に講演集『東北キリシタン探訪』が発売されます。

**昨年来、ご相談いただいた「企画旅行」の実績と予定は、以下の通りです：**

**2023年**

- 4月15～16日 (株)ワールドトラベル仙台様の募集型企画旅行（一泊二日）
- 4月26日 ご友人2名様ツアー（日帰り）
- 5月29～30日 (株)ワールドトラベル仙台様の募集型企画旅行（一泊二日）
- 6月19～20日 ワイズメンズクラブ様主催・15名様ツアー（一泊二日）
- 10月16～17日 宮城県宗教学会連絡協議会会員研修旅行（一泊二日）
- 10月24～26日 日本YMCA 同盟研修・20名様ツアー（二泊三日）
- 11月7日 ご夫婦様主催・2名様ツアー（日帰り）

**2024年**

- 2月18～20日 ニュースレター作成のための内覧旅行（二泊三日）
- 3月29～30日 ご家族様主催・3名様ツアー（一泊二日）
- 4月15日 ご夫婦様主催・2名様ツアー（日帰り）
- 5月18～19日 全国朝教会全国大会オプションツアー（一泊二日 下記参照）
- 5月27～30日 韓国カトリック巡礼団のみなさまのツアー（三泊四日）






2024年 朝教会全国連合第61回全国大会  
**オプションツアー**

**① キリシタンツアー- 5月18日(土)～19日(日) (一泊二日)**  
**「殉教」と「宣教」を新しく知らされる殉教地**  
 「キリシタンの世紀」最後の輝きを示した東北キリシタン。生業と信仰とのつながりの中で宣教の「成功」の表と裏がはつきりと表れた、そのいのちの現場を旅します。  
**ガイド：川上直哉 牧師** (日本基督教団石巻栄光教会)  
**参加費用：30,000円 移動：貸切バス 定員：40名** (先着順にお受けします)

**スケジュール** (予定は変更になる可能性もございます。ご了承ください。)  
**5月18日(土)** 13:00出発～大籠キリシタン殉教公園(岩手県一関市)～三絳塚(宮城県登米市)～18:30館ヶ森高原ホテル着～夕食  
**5月19日(日)** 礼拝・朝食～8:00ホテル発～時宗長徳寺見学(大籠キリシタン記念碑)～えさし藤原の郷(昼食、お買い物)～徳水園～胆沢ダム～仙台キリシタン殉教碑～18:00 仙台駅着 解散

**② 仙台キリスト教ツアー- 5月18日(土)13:00～15:00 (日帰り)**  
 2時間程度の仙台市内のキリスト教の歴史をめぐるとツアーです。東北学院史資料センターを訪問し、東北キリスト教史の起点のひとつである「仙台神学校」の歴史に触れます。人数制限はありません。費用は当日に交通費の実費となります。

**① キリシタンツアー- 5月18日(土)～19日(日) (一泊二日)**  
**「殉教」と「宣教」を新しく知らされる殉教地**  
 「キリシタンの世紀」最後の輝きを示した東北キリシタン。生業と信仰とのつながりの中で宣教の「成功」の表と裏がはつきりと表れた、そのいのちの現場を旅します。  
**ガイド：川上直哉 牧師** (日本基督教団石巻栄光教会)  
**参加費用：30,000円 移動：貸切バス 定員：40名** (先着順にお受けします)

**スケジュール** (予定は変更になる可能性もございます。ご了承ください。)  
**5月18日(土)** 13:00出発～大籠キリシタン殉教公園(岩手県一関市)～三絳塚(宮城県登米市)～18:30館ヶ森高原ホテル着～夕食  
**5月19日(日)** 礼拝・朝食～8:00ホテル発～時宗長徳寺見学(大籠キリシタン記念碑)～えさし藤原の郷(昼食、お買い物)～胆沢ダム～仙台キリシタン殉教碑～18:00 仙台駅着 解散

**② 仙台キリスト教ツアー- 5月18日(土)13:00～15:00 (日帰り)**  
 2時間程度の仙台市内のキリスト教の歴史をめぐるとツアーです。東北学院史資料センターを訪問し、東北キリスト教史の起点のひとつである「仙台神学校」の歴史に触れます。人数制限はありません。費用は当日に交通費の実費となります。

会場案内地図

**メイン会場 東北教会センター「エマオ」**  
 〒980-0012 仙台市青葉区緑町1-13-6 TEL: 022-222-0990  
 ※公益社団法人東北キリスト教協議会  
 所在地：〒980-0012 仙台市青葉区緑町1-13-6 TEL: 022-222-0990  
 ※公益社団法人東北キリスト教協議会  
 所在地：〒980-0012 仙台市青葉区緑町1-13-6 TEL: 022-222-0990



今年5月18～19日に「朝教会」様が企画される  
**東北キリシタン・ツアー**のチラシ。  
 殉教地のみならず、宮城・岩手の  
 美しさ・美味しさを味わって頂く旅を、準備しています。

私たちは「キリストさん」という言葉を、大切に使っています。

最初、この「キリストさん」という言葉は、東北の被災者の皆さんの中から聞こえてきた言葉でした。キリスト教系の支援団体が、多数、津波被災地に入りました。そこで出会ったボランティアの方々を、被災された方々が「キリストさん」とお呼びになったのです。これは、新鮮な響きをもって私たちに聞こえました。

あれから13年経ちました。「キリストさん」たちの働きは、今、どうなっているのでしょうか。

私たちは、その働きが豊かな実を結んでいることを、はっきりと知っています。ですから、その実りを、全国のみなさまにご案内したいと思うのです。今回のニューズレターも、その一つとなればと願っています。その実りとは、次のようなものです——クリスチャンのボランティアも一つの刺激となり、「こんな事じゃいけない」「助け合おう」という思いが、2011年の悲劇の現場で、被災した皆さんの間に湧き上がった。そして、それまでの福祉や医療や教育では手が届かなかったところへと、懸命に手を伸ばそうとする敬愛する方々が、あちこちに現れた。その方々は、私たちを含むキリスト教支援団体とつながってくださり、長く共に歩むことをお許しくだした。——そして、新しい東北が、そこかしこに広がっています。

「この人々こそ、教会の本来あるべき姿を示しているよね」

と、被災地で13年間ずっと働き続けた牧師・中澤竜生さん（東北ヘルプ理事）は言います。

「でも、ここに、牧師はいない。だから、僕はこの人たちと一緒に活動したいんだ」

と、中澤さんは続けるのです。

「キリストさん」の実りは、確かに、東北にあらわれているのです。

そのことを踏まえて、「東北キリシタン」の歴史を辿ります。すると、どうやら「400年前」にも、同様の喜びがあったようです。しかし、そこには試行錯誤があったことも、分かってきます。つまり「試して・行って・錯覚して・誤った」痕跡も、400年前の遺跡に、はっきり見て取れるのです。そしてさらに、その失敗から学んだ克服の跡も、はっきり、確認できる。

今年2月、現在進行形の「キリストさん」の働きの実りを二つたどりながら、1500年代の「永禄年間（織田信長が活躍した時代）」から1700年代の「享保年間（徳川吉宗が幕政改革を行った時代）」へと続くキリシタンの「証」を辿る旅を企画し、実行しました。

東北ヘルプは、こうした企画を、もっと立てたいと願っています。それは非営利活動として行う「交流人口の促進」事業として、展開したいのです。そうした事業を「企画旅行」というそうです。東北ヘルプは一昨年、長く旅行業を営んできた方を理事にお迎えしました。「東北には素晴らしい景色・癒される温泉・おいしい料理が溢れています」と、いつも生き生きとおっしゃいます。

以下、実際に「キリストさんと出会う旅～東北キリシタン・ツアー」の様子をご紹介します。そうしてみなさまに、快適で安全な（そして、必要に応じて廉価な）「ツアー」を、非営利活動として、ご提案したいと思います。個人旅行や修養会・研修などに、いかがでしょうか。是非、ご活用くださればと思います。ご相談は、どうぞ、東北ヘルプまで、お電話・FAX・メールで（ニューズレターの裏表紙をご覧ください）頂ければ幸いです。

(2024年3月14日記)



キリシタンが製鉄業を展開した地を  
殉教公園の高台から臨む景色。  
アニメ映画「もののけ姫」の  
「たたらば」遠景を想起させます。

# ツアー報告

## 宗教の衝突を乗り越える300年

## & キリストさんの二つの現場を巡る旅

### 【旅程】

#### 2月18日(日)

午前中、石巻栄光教会にて日曜礼拝に参加（オプション）

午後1時半 石巻 出立

午後2時半 気仙沼市本吉に「特定非営利活動法人 セミナ〜レ」訪問

午後4時半 気仙沼市馬籠に「佐藤十郎左衛門屋敷裏キリシタン遺跡」訪問

午後6時 南三陸温泉 ホテル観洋着（宿泊）



左 気仙沼市馬籠のキリシタン遺跡  
右 ホテル観洋の朝焼け  
右下 田東山上の「浄土」再現の地

一番下 右 キリシタン資料館にて  
左下 資料館から頂いた「鉄風鈴」



#### 2月19日(月)

朝7時 ホテル出立（道中、コンビニで朝ご飯）

午前8時 田東山（たつがねさん）に到着。以下の各地を訪問

- \* キリシタン到来以前の「浄土」再現の地
- \* 「修験の聖地」とされた「千年の井戸」
- \* そこで起こった仏教・キリスト教の衝突跡

午後10時 南三陸町社会福祉協議会「結の里」を訪問

午後1時 道の駅「林林館」にて「はっと定食」の昼食。

午後2時半 一関市藤沢町大籠に到着。以下の各地を訪問



- \* 150人以上が虐殺された殉教地「地蔵の辻」
- \* 人としての弔いをしたいと願った「上の袖首塚」
- \* キリシタン集落の出入り口となった「台転場」
- \* キリシタン集落跡と最初の製鉄所（焔屋＝どうや）
- \* キリシタンの礼拝所となっていた「大善神」
- \* 60年後に弔いを許された「元禄の碑」
- \* 秘匿され使用された祭具を展示する「大籠キリシタン資料館」



午後4時半 登米市東和町米川に「三経塚」訪問。

午後5時半 一関市藤沢町保呂羽に長徳寺を訪問。「キリシタン殉教碑」を見学。

午後6時 一関市藤沢町黄海の「館ヶ森高原ホテル」宿泊



左:殉教地に隣接する「千年の井戸」の脇にて  
右:殉教地に隣接する館ヶ森高原と、その地の素材で作る料理



## 2月20日(火)

- 午前9時 「館ヶ森高原ホテル」出立
- 午前10時半 奥州市水沢に「後藤寿庵」の町を訪問。  
キリシタンの失敗を乗り越える「寿庵堰」を見学。
- 午前11時半 奥州市胆沢に「胆沢ダム」を訪問。  
ダム湖の向こうにバテレン捕縛の地を見る。
- お昼頃 コンビニで軽食
- 午後2時 仙台への入り口となる「宮床」のキリシタン遺跡訪問
- 午後3時 宮城県富谷市に「松風亭」訪問。キリシタン茶席に癒される。
- 午後6時 仙台駅解散

## 【費用】

おひとり様あたり 約30,000円 (上記二泊三日・六食付・石巻発/仙台着の移動費・お茶席代込)

※非営利活動ですから「ガイド料」は不要です。

\* \* \* \*

## 上記の他に、以下の各地を回る旅程も編成できます：

- キリシタン最後の輝き：慶長遣欧使節関連史跡
- 「人柱」はもういない：キリシタンによる相模土手と「お鶴明神」
- 「キリシタン」から「福音を携えて教会を出たキリストさん」へ：布施辰治関連史跡
- 水沢からの殉教の道の終着点：「仙台大殉教」記念碑
- 「3.11」復興の矛盾を跳ね返す「キリストさん」：雄勝ローズ・ファクトリーガーデン
- 「歩く速度」で被災地を旅し、巡礼する：みちのく潮風トレイル
- 福島の矛盾の中で立ち尽くす「キリストさん」たち：フクシマの現場

## 「キリストさん」に出会う その1

～秋山牧師・中澤牧師と一緒に、被災地の新しい障がい児者施設を訪問する～

本誌5ページの旅程表のとおり、2024年2月18日(日)午後2時半に、気仙沼市本吉にあるNPO法人「セミナーレ」を訪問しました。法人の立ち上げから直接に深くかかわった二人の東北ヘルプ理事・秋山善久さん(日本同盟基督教団 仙台のぞみ教会牧師)と中澤竜生さん(基督聖協団 仙台宣教センター宣教師)が、ご案内くださいました。以下、「セミナーレ」理事長の佐藤工(さとう・たくみ)さんのインタビューをお分かちします。

(2023年3月20日 川上直哉 記)

——ホームページを拝見しますと、設立の経緯が以下のように記されていました。

震災後、過度なストレスを受けた障がい児たちが、暴力やこだわり、不登校などの問題行動を起こしました。避難所での生活もままならなくなり、家族は疲弊し、ひとりの民生員(現、理事代表)に助けを求めました。民生員の呼びかけに多くの県内外の支援者が集まり、セミナーレの活動がはじまりました。2013年12月に法人設立、2014年2月から、放課後等デイサービス事業所「ほっぷ」を開設。障がい児と家族の支援を始めました。

現在、事業所「ほっぷ」では、子どもたちの放課後の受け皿としての放課後等デイサービス、さらに、18歳以上の障がい児者や未就学児を昼間に預かる日中一時支援、そして、保護者たちの休息のため、また急な所用のときに宿泊で障がい児者を預かる短期入所事業を行っています。

その「最初の一步」から、私たち東北ヘルプは、佐藤工さんとご一緒させていただきました。本当に、たくさんの紆余曲折がありましたね。折々に、私たちも、全国のみなさまに、ニュースレターでご様子をお伝えさせていただきました。そして、また「一步」お進みになったと伺い、今日はお伺いしました。

佐藤工(さとう たくみ)さん

本当に、ここまで、たくさんのことがありました。本当にたくさんの方々のお力をお借りして、今があります。本当に感謝しています。





私たちは、障がいと一緒に生きる子どもたちのお世話をしています。私たちがお世話する子どもたちは、どうしても服薬をしなければならないケースが多いのです。それで、運動不足にもなりがちです。薬の効果を上げるためにも「もっと何かできることがある」と考えて、努力してきました。そしてついに、今年度から「作業療法士・理学療法士・公認心理士」の三職を、雇用することができたのです。この三職で「感覚統合療法」を行うことができます。

——今年度の、大きな一歩ですね。

佐藤工さん

まだ、昨年夏にようやく始まった体制です。でも、その「次」を考えています。次は「言語聴覚士」を、と考えているのです。公認心理士が検査をして、療法士が手当てをする。そうすれば、きっと「聞く・読む・話す」ということを、みんながもっと楽しくできるようになる。そんなことを考えています。

——こうした取り組みは、あまり他では見られませんね。

佐藤工さん

私の気持ちは「いつも一年生」です。初めてのことに、いつも挑戦します。そうしますと、いつも、やりがいを感じます。

私は民生委員を19年やっています。自立支援協議会の委員も担当しています。そうした中で、「前に進まない行政」という声を、やはり、聞くことがあるのです。では、どうするのか。私たちは現場にいるのです。批判しているだけでは、どうにもならない。それで考えました。「行政に指導を仰ぐ」ということを、意識的に始めました。たとえば「はじめての試み」をやりたいので、と、相談し、指導を仰ぐのです。そうすれば、おのずと行政も動きますでしょう。そうした工夫の中で、たとえば保健師等の他業種とも連携をして行く。そうした工夫の余地は、まだまだ、あるのだと思います。

——今年の1月1日に、能登で大震災が起こりました。そこに、ここ・東日本大震災の被災地での工夫の積み重ねが伝わるといいですね。



佐藤工さん

そうですね・・・地震の規模は、こちらが大きかったようです。能登は縦揺れで、倒壊が目立っていた。こちらは津波の影響が甚大でした。火事が大きな被害をもたらしたことは、こちら・気仙沼と、同じでした。

テレビを見ているだけの私ですが、それでも「こちらの反省点は生かされていない」と感じました。「なんとか、伝えたい」と思いました。今、皆さんと話をすると、やっぱり、思い出しますね。今日までの長い道のりがあったのです。ここには多くの協力があつた。そこから生まれたものがあるのです。それが引き継がれば、きっと、能登でも俊敏に復興ができるのではないかと考えています。

秋山さん

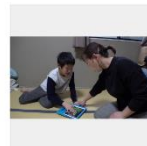
報道で知ったのですが、能登の避難所で「障がい児が追い出された」という事例が起こったようです。こちらでの経験は、活かされていないのだと感じました。

避難所に行けない障がい者と家族、求める場所は「家族と一緒に過ごせる場所」

1/24(水) 15:34 閲覧 65



中京テレビ NEWS



多くの人が身を寄せる避難所にて、障がいのある子どもを持つ家族が他の避難者と生活を共にすることは難しい。中津川から避難所へ、1.5次避難所へ、"家族と一緒に過ごせる"場所を求めて、避難所を転々とする障がい児と家族取材した。

<https://news.yahoo.co.jp/articles/2ff8cd80d464c5a46823ed0d43c53c3db3dd14b4>

佐藤工さん

でも、発災後すぐ、気仙沼の保健師が支援に行きました。そうやって、誰かが先頭になって、一歩踏み出さないといけないと思っています。「障害者」の被災現場は、まず避難所の確保が必要ですが、当然、要支援避難者の支援には配慮が必要です。そして、その配慮はいつも、切迫しているのです。

——でも、要請されていないのに、こちらから押しかけることも、なかなかできません。

佐藤工さん

どうでしょうか。障がい児者への支援については、切迫している場合が多いのです。遠慮はいらぬようにも思えてなりません。実際、気仙沼の「3.11」の場合は、家庭崩壊の危機に瀕していたいくつかのご家庭があつたのです。私にも相談があり、そうしてこの施設も始まったのです。「多動の子ども」も「自閉の子ども」も「奇声を発する子ども」もいます。緊張状態にあるのですから、自分自身や周囲に危害を加える危険性も生まれます。適切な対応が、最初必要とされます。それが基本的なことなのですが、気仙沼では、なかなか、それができなかつた。そして今回、能登でも、上手くいっているとは言えない様子です。

——目の前の人、一人ひとりが大事ですね。「障がい者」一般ではなく、「この人」のために何ができるか、という視点が、とても重要であることを、佐藤工さんの実践から、私たちは学んできた気がします。

佐藤工さん

私が相談を受けたケースは、「3人」が中心になってまとまっている19人の団体でした。そして、その団体のほとんどの方々が、今、この施設を利用してくださっています。被災時に「行き場がない」という大きな苦勞を担われた皆さんでした。一緒に、この施設を作り上げた仲間です。

秋山さん

特に、印象に残っていることがあります。皆さん、お子さんに障がいがあって、どこからも助けももらえない。全員、とても苦しんでおられたのです。それなのに、「あの人を助けてください」と、皆さん、自分のことを後回しにして、仲間の心配をされていました。それは、感動的なことでした。

佐藤工さん

そうした思いに、何とかこたえたいと、一所懸命やってきました。今でも私たちの毎朝のミーティングでは「“障がい児者と保護者をずっと支える居場所”を作るために全力を尽くします」と唱和して、仕事を始めています。

——そして、その皆さんと福祉施設ができた。そこにはキリスト教諸団体をはじめとして、たくさんの協力の輪が広がりました。そして、今、利用者は広範囲に広がっていますね。

佐藤工さん

はい。東磐井（一関市の東半分）、気仙沼の市街地、南三陸町と、広域から利用していただいています。たくさんの課題を、利用者の皆さんは担っておられます。ですから、よくお話を聞いて、私たちにできることを取捨選択することが大事になりました。



特に私たちが力を入れてきたのは「生活介護」という支援でした。それから、成人の年齢になった時に社会で活動できるように、と考えました。以前、その始まりの時に、ニュースレターでご紹介いただきましたね。あれはちょうど、農園を始めたばかりの頃でした。

—はい。そして、その時の課題は「ショートステイ」でした。なかなか、経費的に実現が難しいけれど、なんとか実施していきたいとお話くださっていました。

佐藤工さん

はい。それはつまり、「障がい児者の家族」へのケアを考えてのことです。親御さんたちにも、休息が必要なのです。何とか実現したいと努力を続け、今、およそ「毎日3人」を夜、お預かりしています。「経営」を考えたなら「儲からない」のです。でも、「ニーズ」には、応えなければ、施設を運営している意味がない。そう思って、たとえ「損」しても続けようと、工夫を凝らしています。

—農作業は、成果を見ましたか？

佐藤工さん

はい。去年は「50万円」くらい、農作物が売れたのです。施設で「秋祭り」をしたら、利用者のご家族・お知り合いを中心に、たくさんの方が施設に来てくださいました。



中澤さん

工（たくみ）さんは、もともと、野菜を取り扱うご商売をしておられたのでしたね。

佐藤工さん

はい。ですから、農園から収穫される野菜については、目利きができます。その上で、皆さんには「安い」という評判を頂けるように考えて、販売しました。「地域のための」農園なのだと、皆さんにアピールしたかったのです。

—でも「薄利多売」に足元をすくわれませんか？

佐藤工さん

その心配は、ありますね。でも、この地域では、大丈夫です。皆さん、「安い」ことを喜んでくださって、寄付を下さるのです。「地域のために」という思いが伝わり、そうした形で受け止めて頂いて、還流してくる。それで、心配しないで「安く」販売ができています。

——被災地で困っている当事者への支援が、地域貢献へとつながり、みんなで生きる場を作り出している。好循環が生まれているのですね。

佐藤工さん

はい。そしてさらに、動きは広がっています。この地域にある福祉系の六法人で「子ども食堂」をやろう、と話が始まっているのです。地域と一緒にやることで、活動は広がっていく。そういう恵まれた中を、私たちは歩んでいると思います。



インタビューを終えた後、秋山理事から、東北ヘルプへお寄せいただいた指定献金をお渡ししました。皆様の思いを、また、お届けできましたことを、感謝しつつ、報告いたします。

午後4時頃、私たちは 세미나～レを後にしました。玄関まで、佐藤さんがお見送りくださいました。

(了)



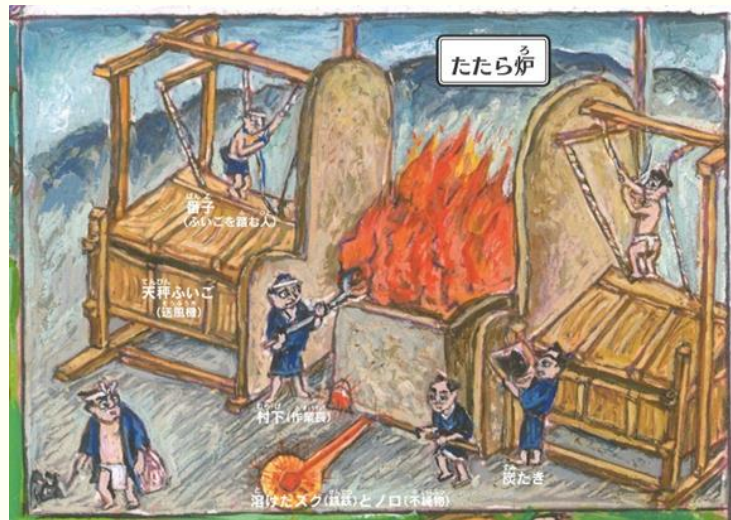
## キリシタン遺跡を巡って

東北ヘルプ理事 秋山善久  
(日本同盟基督教団 仙台のぞみ教会 牧師)

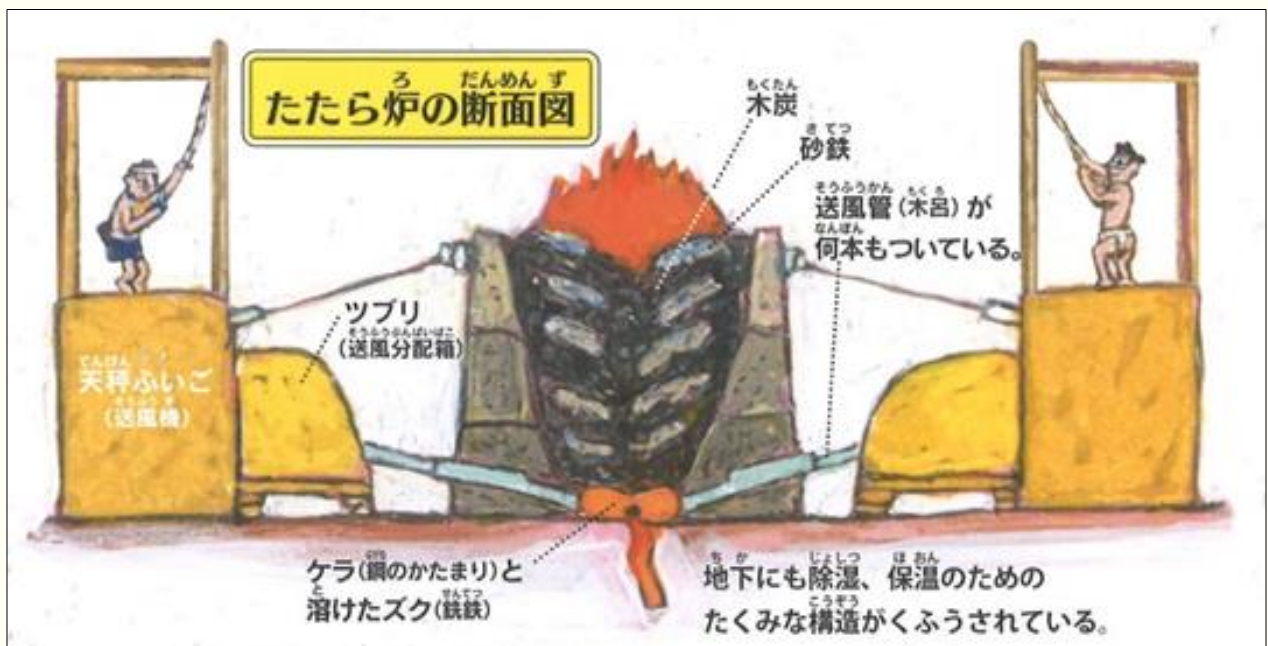
川上先生の案内により、宮城県登米市東和町周辺に広がるキリシタンの遺跡と、かつて仏教の一大拠点があったとされる田束山（たつがねさん）への道を車で巡りました。遺跡として派手なものはありませんが、忘れられた先人たちの呻きにも似た空気感に圧倒されました。少し大げさな言い方をすれば、日本における宗教の在り方を考えさせられる経験でした。

気仙沼市本吉町馬籠（まごめ）のキリシタン遺跡（佐藤十郎左衛門屋敷裏キリシタン遺跡）は、急な斜面を背景にした竹藪の中にありました。教えられなければキリシタンのものかということさえわかりません。そのことは他の遺跡にも言えることで、建立者は石を置くだけでもキリシタンの疑いをかけられることを警戒したのでしょう。

400年前、この地域は、木炭を燃料として砂鉄から鉄を抽出する「たたら」の窯が幾つもあったということです。伊達領内では、その「たたら」を「炯屋（どうや）」と呼んだそうです。そのための木を伐採する人・炭を焼く人、砂鉄を採取する人、砂鉄の運搬を担当する人、ふいごで空気を送る人・できた鉄を精錬所へ輸送する人・・・等々、一つの炯屋ごとに、労働者とその家族で数百名が関わったようです。

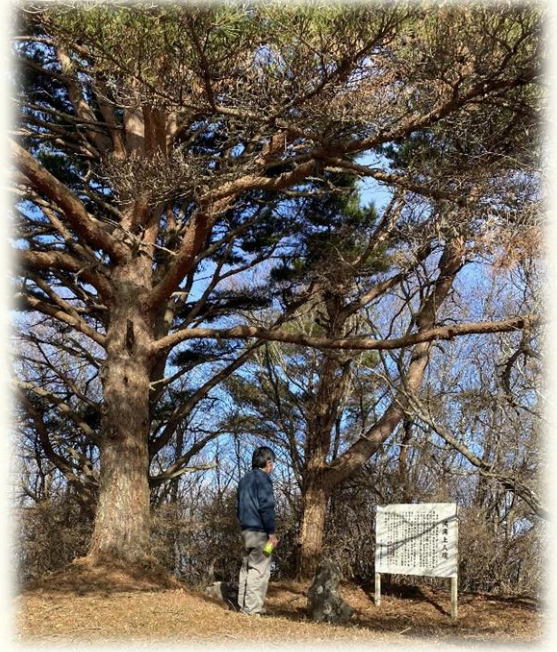


永田和宏 編 / 山崎克己 絵 『イチからつくる 鉄』2019年、農文協



驚くことに、そうしたことが山間の全く閉ざされた地域をつないで為されたのです。この地域の特色は、製鉄技術が信仰と深く結びついていたことです。砂鉄と木炭から鉄を抽出するのは秘伝で、決して外に漏れてはならないものでした。この技術を持っていたのがキリシタンであり、その技術とは、閉ざされた地域を広域につなぐネットワークを産み出すものでした。そのことが幕府の追及から最後まで逃れ得た理由になります。しかし同時に悲惨な出来事・殉教も、そこに起こったのでした。

権力者による宗教への弾圧ということでは、田東山（たつがねさん）にあったという数多くの仏教施設も似たような側面があったと言えます。標高512mの田東山は、古く平安時代から山岳信仰の修験場として知られていました。奥州藤原氏の保護によって最盛期には「七十余」もの僧房があったということです。奥州藤原氏の滅亡の後、寺社は荒廃して行きます。そして製鉄業と共に、キリシタン宗がこの仏教と修験の聖地にも広がって来ました。その16世紀、「満海上人」がこの地に現れ、荒廃した寺社の復興のため全国行脚しキリシタン宗と対峙し折伏を試みたのですが、ついにその労が報われないことに失望し、この山で即身成仏した、と伝えられています。江戸時代に建てられた満海上人の顕彰碑の傍には、現在、NTTの電波塔が置かれています。意図したものではありませんが、古いものと新しいものが隣り合わせて発信しているような印象でした。



キリシタン史跡「満海上人壇」にて  
背後にNTTの電波塔が立っています。

けれども、この地の寺社が徹底的に弾圧されたのは、慶応4年(1868)のこと。その時、明治政府によって主導された廃仏毀釈による——と、川上師から説明を受けました。その時、最後の寺も取り壊され、今は何も残らなくなったというのです。山頂に立つと、遠くリアス式海岸から牡鹿半島まで見渡せました。5月には山つつじが咲き誇る観光名所になっています。

終末を思わせる東日本大震災から13年が過ぎてみると、あの震災は人の心の断層を剥ぎ出したのかもしれないという思いがします。弱い立場に置き去りにされている人は、今日の社会の中にも残されているからです。原発事故による被災者もその一つでしょう。生きている「かけがえのないもの」を、根こそぎ筆り取ろう（おしりとろう）とする力があるのです。それに抗うことができない理不尽さ、裏切り、怒りと復讐心、絶望感、そうしたものがなまぜになったものが横たわっています。

400年前、キリシタンたちは主イエス・キリストに倣って赦しを願い、仏教者たちはお経に記された浄土をこの絶景に重ねたのでしょう。確かなことは、そこに自分を見失わない軸があった。キリシタンの遺跡の石は、そうしたことの歴史的な事実と、彼らが見上げた主の姿を証言していると言えるでしょう。

ここに立つと、すべてのことが逆転していることに気づかされます。当時、絶大な力を持った権力者の力は地中であって無力であり、信仰者の魂は天に置かれたまま希望があるということなのです。

(了)

## 「キリストさん」に出会う その2

～中澤牧師と一緒に、能登支援に向かう被災地の社会福祉協議会を訪問する～

本誌5ページの旅程表のとおり、2024年2月19日(月)午前10時に、南三陸町へ行き、社会福祉法人 南三陸社会福祉協議会の「結の里」を訪問しました。2011年の震災の中で、自ら被災しながら地域のための奮闘し続けてきた高橋吏佳さんを訪ねたのでした。高橋さんには、東北ヘルプ理事の中澤先生(基督聖協団仙台宣教センター 宣教師)が、ずっと、伴走し支援されてきました。

中澤先生にご案内いただき、秋山先生と共に、高橋さんからお話を伺いました。ちょうど、「能登支援」のための準備にお忙しくされている中でした。以下は、その記録です。

(2023年3月21日 川上直哉 記)

—たいへんご無沙汰をしておりました。

秋山先生とは、初対面ですね。

恐縮です、自己紹介を、

お願いできますでしょうか。

高橋吏佳さん

はい。私は志津川で生まれ育ちました。仙台の学校にも通ったことがありますが、私はずっと、ここで過ごし、社会人になってからは社会福祉協議会にずっと勤めています。穏やかな海を見てきたのです。私の家族も、遠洋漁業に従事していました。



社会福祉法人 南三陸社会福祉協議会が運営する「結の里」。復興公営住宅等が立ち並ぶ「新しい町」の中で交流スペースと高齢者福祉事業を営んでいます。

—美しい志津川の海と共に、この地に根差して暮らしてこられた。そして、あの津波が起こった。吏佳さんのご夫君は、いまだ、その日から、お帰りになりません。

高橋さん

夫は出会う前からずっと、役場職員でした。震災の時は「まちづくり」を担当していました。あの日、防災庁舎で消息を絶ち、今も行方不明です。





よく「復興」という言葉が聞こえます。でも「人の気持ち」が追いついていない気がします。役場にも、どこか「元気がない」ような気がする時があります。住民は、元気なんですけれどね……。ですから、その「元気」を活かすために、社会福祉協議会があるのだと思っています。

——「住民主体」ということですね。

高橋さん

はい。でも「住民主体」とは、「丸投げ」とは違うと思っています。「共に」ということが大切にされて、はじめて「住民主体」となるのです。

——「共に」ということ。そのためには

「どんな町を目指すのか」という、目標が大事になりますね。

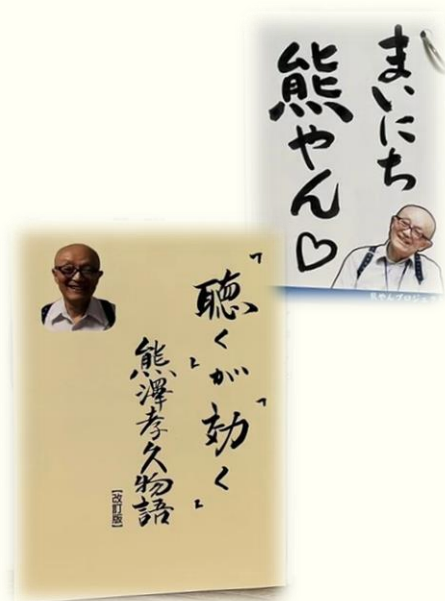
高橋さん

震災前に夫が描いていた町でありたいと、そう思って、私は努力をしています。「元気な町」「海の町」「でも実は、森林面積が全体の八割を覆っている町」「循環の町」——そうした町であれば、そこに住む人は、元気になっていくと思うのです。

——震災で、多くのことに気づかされたらと、高橋さんはあちこちでお話になっていますね。

高橋さん

はい。「普段から・流れるように・少しでも町がよくなるように、私たちは働くものなのだ」と、私たちは、震災で、痛いほど知ったのです。「決まったことを、とにかく、やっておく」というのが、震災前の私たちだったと思います。そして、震災で、みんな困ったのです。追い詰められるようにして「柔軟な機動力を持たないといけない」と、知らされました。特に、大津の社会福祉協議会から応援に来てくれた「熊やん」こと熊澤孝久さんが、私たちにスピリットを吹き込んでくれました。そして、私たちは「今までとは違う社協」になったと思うのです。そうすると、他の社会福祉協議会のみなさまからも、気づきをたくさん得られるようになりました。



大津市社共 名誉相談員であった  
故 熊澤孝久さんの  
書物と「日めくりカレンダー」

——大津市には、原発事故に悩む母子を長く受け入れ続けた市民団体「びわこ1・2・3キャンプ」がありました。東北ヘルプも、そのお手伝いをさせて頂いていました。その代表の方から、「熊やん」さんのことを、教えて頂いていたのです。高橋さんも、震災によって生まれた新しい出会い中で、新しい可能性を拓かれたのですね。



「結の里」の交流スペース。周辺の復興住宅にお住まいの方が、ふらりと・次々と、訪れていました。

高橋さん

「小さい町の小さい社協」——でも、それが、たくさんの力を得て、みんなが喜ぶものとなり、そして、「社協」の認知度が上がる、という、いい循環が生まれていると思います。そうする中で、情報も細かく集まるようになりました。

——そうした中で、「能登」への支援も、湧き上がってきたのですね。

高橋さん

はい。「能登に、何か、したい！」という思いは、1月1日の発災直後に、私を含めて、たくさんの方々の胸に湧き上がってきたものでした。「4日の仕事始めまで、待てない」という気持ちがあったのです。そうした思いを集め、プロジェクトを立ち上げて、できることを探りました。すると、不安な様子だったみんなが、安心して行きました。

——「能登震災」のニュースは、東日本大震災の痛みをぶり返すものとなりましたか。



高橋さん

はい。本当に、不安定になった人が多かったのです。私たちも、少子高齢過疎の現場に生きています。激しいことは、まったくできない。募金も、限界があります。でも、「できること」をみんなで探しました。そして「アームカバー」を作ろう、と声が上がりました。「何が役に立つか、私たちなら、分かるのではないか」という声でした。「100枚」を目標にして、みんなで作り始めました。すると、気づきましたら「450枚」も集まったのです。どんどん、

みんなが自分で動き出したのでした。さらに新聞でも取り上げてくれまして、仙台や岩沼からも、手製の「アームカバー」が送られてきました。



それから、「絵馬」にメッセージを書いてもらって、タペストリーにしました。「自分たちだったら、何がうれしいか」と考えて、できることを探す。そうして、心が安定する。夢中になる時間は尊い、と思いました。



—そうした活動の予算的裏付けは、やはり、行政なのですか？

高橋さん

いえいえ！ 私たち社協は、原則として、自主財源・自主運営なのです。行政からの補助金がありますが、その用途は「人件費」に限られています。私たちの事業は、募金などが頼りなのです。ですから、自主財源を少しでも確保できるようにと、たとえば私たちは「介護保険事業」を展開しています。そうして、この「結の里」の施設に関わる借金を、一所懸命返済しています。

—それはまるで、教会のようですね！教会も、募金（献金）と、そして社会事業・福祉時事業を興しての財源確保に努力して、世の中のために奉仕しようとしているのです。そして、自主事業として、能登への支援が、いよいよ、行われますね。



事務室の壁際には、支援物資がぎっしり積まれていました。

高橋さん

はい。今、珠洲市の社会福祉協議会に募金と支援物資を持っていこうと計画しています。2月22日夕方に、大型バスで行きます。17人がバスに乗り込みますが、その内7名が役場職員です。三泊四日、車中泊をして、ボランティアをして来ます。参加者の年齢層は30代から70代まで。消防士や水道事業所の方などが参加されます。

——市役所職員と協働されるのですね。

高橋吏佳さん

はい。珠洲市の社会福祉協議会と繋がり、実情がわかりましたから「何かしたい」と役所で話をしていたのです。1月15日のことでした。その話をした後、たった2時間後に、町長から「行って来てください」と連絡がありました。「町がバスを出します」とのことでした。驚きました。そうして、今回の災害では宮城県初の「災害ボランティア・バス」となったのです。これは「住民が出したバス」です。実に「被災地の町長」らしい動きを、佐藤仁町長は、してくださいました。

——珠洲市の状況は、どんな感じでしょうか。

高橋吏佳さん

南三陸町と同じような町だと思いました。でも、高齢化はもっと進んでいるかもしれません。その状況を現場で丁寧に見ながら、炊き出しなどのボランティア活動をしてこようと思います。向こうに行って、何でも、ご要望に応じたいと思います。ただ、なかなか、現地の状況は、私たちにも伝わってきません。珠洲市の側も、今、本当に大変なのだと思います。連絡が、必ずしも頻繁につながるわけではないのです。でも「待つこともボランティア」だと思って、準備を進めています。寄り添うとは、そう言うことでしょうか。



「待つことも、ボランティア」という想いは実り、  
二月二日朝、南三陸町の「ボランティアバス」は、  
無事に出発しました。

<https://www.khb-tv.co.jp/news/15175733>

——南三陸町社会福祉協議会としてのボランティア バスは、初めての試みですか？

高橋さん

いいえ。以前「西日本豪雨」で、岡山に行った事があります。嬉しいことに、その時の出会いは素晴らしいものとなりました。今でも岡山の皆さんと、私たちは、繋がっています。

——この南三陸町社会福祉協議会の皆さんに、東北ヘルプ理事の中澤牧師が、ずっと、伴走してこられました。今回も、一緒なさせて頂いて、お手伝いをなさるのですね。

中澤さん

はい。まず現地からの要請があった「飲料水」については、「100箱」ほど、持っていきます。先日、能登に視察に行きまして、支援体制を構築してきました。今、七尾に物資倉庫が作られたのです。そこにあるものを、運びます。そのようにして、高橋さんたちをバックアップできることを、とても嬉しく思います。

私の側では、8人でチームを組んでいきます。何があっても対応できるように準備をしています。ブルーシートも足りないようです。ガスも。そうしたことも、対応できます。能登半島の手前までは、流通も通常通り、開通しています。でも、そこから先が大変な様子です。震災前に「30分」かかる距離が、今は「2時間程度」かかるのです。ですから、今回、現地で頑張っている仲間を珠洲市に繋がられればと願っています。ご要請のあった「飲料水」は、仲間との連携の中で、大丈夫です、準備できました。



高橋さん

「Amazon のほしい物リスト」など、13年前の「3.11」から比べて、世の中には格段の進歩が見られると思います。衛星電話を使って、途切れ途切れの通話に頼るほかなかった13年前の私たちのことを思い出すのです。

でも、今は、今の課題がある。現地では、13年前と同じく、リーダーシップ争いもあるでしょう。そこで疲弊することも、かならず、あるのだと思います。

## 中澤さん

13年前を思い出しますね。みんな「真面目」で「行政を通さなければ」と、苦しそうだった。そうした中で、行政とも緊密につながっている社会福祉協議会が動くことの意味を、とても感じた13年間でした。

## 秋山さん

私は金沢に住んだことがあります。能登には能登の地域性があることを、痛感した思い出があるのです。あるいは、すぐには打ち解けないかもしれない。でも、必ず真心は通る。それが能登です。ここ・東北の被災地からはるばる行くのだ、ということだけでも、大きな力になると思います。

## 高橋さん

数ヶ月すれば、寂しさ辛さが怒りに変わるはずです。私たちは、その現場に向き合い、対応してきたのです。何とか、これからも、その経験を活かしたいと思っています。

本誌 ページに、南三陸社会福祉協議会の「能登支援」に帯同された中澤先生ご夫妻の報告がございます。無事に・意義深く、活動が負えられたことを、感謝しています。

(2023年3月22日 川上直哉 記)



# キリシタン殉教地に立って

東北ヘルプ理事 中澤竜生

(基督聖協団仙台宣教センター 宣教師)



一六三七年に勃発した農民戦争「島原の乱」の際、全国のキリシタンが  
続々と救援に駆け付けたことに恐怖した江戸幕府は、禁教令を全国に徹底  
しました。その結果、「自分たちは特別」と思っていた大籠では、百五十人を  
超す人々が磔（はりつけ）にされ、首を落とされました。その遺体は吊りこ  
を禁じられ、街道入り口に晒（さら）されました。

左は、その現場「地蔵の辻」の二〇二四年二十九日の写真です。

大震災が発生し、震災前には東日本訪れたことがなかった南三陸町への支援活動が続きました。その際に町民の方から「キリシタンの無念を晴らす」という話を伺いました。この言葉は私がクリスチャンであることを踏まえて述べられたものでした。そこで、私は初めてこの地がキリシタンの町であったことを知りました。つまり、キリシタンとは主に西日本に存在していたと思っていたのです。

その後、「東北ヘルプ」の事業として、東北キリシタンの研究・発掘が始まりました。それは「東北キリシタンツアー」を企画して、被災地の交流人口を維持しようという努力でした。旅行社などのお力も借り、ツアーは整備されてきました。

今回、私もこのツアーに参加してみました。そして、この地域でもキリシタンの活動が盛んであったことを、はっきりと知らされました。この点についてもう少し詳しく説明したいと思います。

今回のツアーは、東北ヘルプ理事の秋山先生と「二人」で「二泊三日」をかけて史跡を巡るものとした。心温まる過去の信仰者との出会いを求める一方で、しかし、その信仰者たちが破壊をもたらした哀しい出来事についても考察するものとなっていました。



キリシタンが隆盛を示した  
17世紀初頭、  
破壊され川に流された  
という「流れ不動」。



今回、私が特にご紹介したいと思うのは、ツアーの「2日目・3日目」のお話です（本誌6頁の「旅程」をご覧ください）。このツアーは宮城県と岩手県をまたいで行われました。それは旧伊達領の版図が岩手県北上市まで広がっていたからです。この伊達領北部は、古くはキリシタンによる「たたら製鉄」が盛んでした。そしてその歴史は、後藤寿庵が始めた大規模な農業用水路「寿庵堰」の運用にまで及びます。ツアーの「2日目」は「たたら製鉄」の現場を訪ね、また「3日目」は「寿庵堰」とそこに起こった殉教の物語に触れる旅となります。

岩手県一関市藤沢町大籠・宮城県登米市東和町米川には、1639年頃から1700年代初頭にかけて、キリシタンが殉教したとされる跡が、多く点在しています。それぞれの殉教地には、私たちが静かに考えることのできる逸話があります。



東和町米川には「三経塚」があります。三経塚という名前からも分かるように、三箇所（つなぎ）の塚があるそうです。綱木（つなぎ）という場所にある小さな山の上の「海無沢三経塚」が、特に注目されます。その場所に辿り着く経路の途中には、処刑された場所と、処刑される前の控え場所とされる広場があります。その広場には120名が待機したと伝えられています。

当時、キリシタンをやめると宣言すれば赦免されるという状況の中で、それをせず殉教した仙台藩のキリシタンたちの覚悟は、尋常ではないほどに厳しく、恐れながらも天国への思いを馳せ、その地に残る仲間たちに生きるよう託したことに深い感銘を覚えます。その場所に静かに立ち、当時の情景を垣間見ると、まるでタイムスリップしたかのように感じられ、やさしく静かな風が吹きながらも、その時代の人びとの強い感情（霊性）が伝わってきます。



一方で藤沢町大籠は、殉教の恐ろしさを感じる地でもあります。キリシタンが集住していた集落跡をたどり、小川を遡って奥に進むと、最初の製鉄所（焔屋＝どうや）跡と、キリシタンが礼拝した場所がありました。そこに立てられていた案内板には「大善神」そして「ハヤリガミ（流行神）」と書かれていました。この地で迫害が起こる前には、人々はその教えに耳を傾け祈ったのだと思います。そして、製鉄業は一大産業となり、人々の生活を潤しました。



上:この先が「キリシタン集落」であったことを示す「台転場」  
下:最初の製鉄所が建てられ、長く礼拝所となった場所「大善神」  
(中澤竜生先生のイラストです)



しかし、禁教令が一段と厳しくなった途端に、「キリシタンは人ではない」という言葉と、その遺体を化け物として晒（さら）す出来事が起こったのです。それは、人が心底に持つおぞましさを思わせるものです。

ここは殉教の地であり、時代の繁栄をもたらした人々が一変して不安と恐怖に襲われた場所である。その様子を目の当たりにし、何とか回避できないかと思う人々もいただろう。お寺などでキリシタンの心を守りつつ、何とか人々を守ろうとする努力も行われた。そうした伝承を現地で聞きますと、思わず胸が熱くなります。「これは今の時代には欠かせない重要な話だ」と感じました。他にもいくつかの場所を訪れましたが、静かに思索するにはこの場所が特に適していました。

最後に、私たちは茶室で、キリシタンにゆかりのあるお茶を頂きました。これまでの数々の貴重な話を聞き、現代に戻る準備が整ったと感じました。

(了)



## 繋げること・繋がること

風化に抗うために・郷内宣子さんインタビュー



仙台の南隣・名取市の閑上（ゆりあげ）地区にある日和山。  
この築山を舞台として、手前の石碑を示す大道具一つをもって  
「ファミリーツリー」の舞台は作られていました。

「風化」は、とどまりません。そのことを私たちは、2011年の夏には、はっきりと感じていました。そして「東北キリシタンツアー」等、工夫を始めました。「風化に抗う」ということ。でもそれは、なかなか、手ごたえのない・とても難しい事柄に思われました。

2024年3月に、仙台の南にある名取市で、ひとつの演劇が上演されました。「ファミリーツリー」という演劇でした。それは、「風化に抗う」新しい可能性を示してくれる演劇でした。

演劇の舞台は、名取市の沿岸部・閑上（ゆりあげ）です。大震災前は沿岸部に多くの住宅が建ち、2,000世帯以上約5,700人が住んでいた町です。大津波に襲われ、住民の約1割にも及ぶ約750人が犠牲になったといわれています。

その閑上には「日和山」があります。そのそばに、四つの大きな黒い石碑が立っています。向かって右端の石碑の上部には「昭和8年 三陸地震津波 震嘯記念碑」と刻まれています。その慰霊碑全面に、この地に津波が来ることを警告する言葉が記録されていました。「しかし、その警告は、忘れられていたのです」と、この地の語り部の方は、悔しそうにお話になります。教訓は、伝わらない。風化には、抗えないのか——そんな思いを抱かせる石碑です。



閑上 日和山の石碑の残り三つは、「忠魂碑」と「英霊碑」と「大東亜戦 戦死者氏名」と題されています。この三つは「戦争」の哀しみの記憶を風化させまい、として建てられたものでした。

戦争の悲劇と、津波の悲劇。この二つを別々に語るなら、私たちはきっと、それぞれの悲劇の風化を甘受せざるを得ないだろう。でも、この二つを繋ぐことができれば、事柄は、ガラッと変わるのではないか。——演劇「ファミリーツリー」は、そうしたことに挑戦する舞台になっていました。



戦争と、津波と、ふたつの悲劇を繋ぐものは何でしょうか。それは「日常」である。家族がいて、喧嘩がある。プライバシーの侵害は、いつものこと。いつもいつも気を遣う。そんな苦労がある。でも、その「日常」の中に、人々が生きている。その「日常」が、戦争で破られ、津波で引き裂かれた。「日常」を大切に・大切に描き、その壊れる痛みをもって、戦争と津波とをつなぐ。そうして、ふたつの悲劇を一つにして、風化に抗う。

演劇「ファミリーツリー」は、そのような芸術作品になっていました。

2024年2月21日（水）午後、石巻で、「ファミリーツリー」に出演される郷内宣子さんに、お話を伺いました。郷内さんは石巻市内の復興公営住宅集会場で支援活動にご参加くださった、その後のお時間を頂いたのです。この支援活動を主導されている石巻広域ワイズメンズクラブの清水弘一さんにも、一緒させていただきました。そして3月3日の最終日の公演を、清水さんと一緒に観劇した感想を、ある方にお書き頂きました。

世界に点在する哀しみの記憶を、繋げることができれば。それをつなぐ人になれば。そうしたら、きっと、風化に抗うことができる。そうした勇気を頂いたような気がします。以下、インタビューと観劇感想を、お送りいたします。

(2024年3月23日 川上直哉 記)

——今日は、お時間を頂きますことを、心から感謝します。  
まず、自己紹介をお願いします。

郷内さん

北海道函館で生まれました。親は歯医者をしていました。2歳の時、戦争で青森に疎開し、そのまま、野辺地で高校まで過ごしました。調理師学校に進学するために仙台に来て、ずっと仙台に住んでいます。主婦をしていました。二十年ほど前に演劇を始めたのです。十年ほど、劇団に所属しました。その後もずっと、年に2～3本、出演しています。



——震災で仙台のご自宅は「半壊」となったと伺っています。

そうした経験も踏まえて、今回の演劇に、どんな思いをお持ちでしょうか。

郷内さん

「ファミリーツリー」は、仙台市の南隣にある名取市閑上（ゆりあげ）が舞台になっています。私は、その場所に、今まで、縁がなかったのです。7年前、相澤一成さんという方が、この閑上を舞台とする脚本を作ったところ、賞をとり、新しい出会いも生まれ、実行委員会ができました。それ以来、朗読劇などで、何度も上演されてきたのでした。

今回、この「ファミリーツリー」に出演させていただくにあたり、思うことは、たくさんあります。私も、震災を経てはいます。でも、津波や火災、そして原発の被害を直接受けたわけではないのです。そうした多大な被害を体験なさった皆さんのお気持ちを考える機会を与えられたと思っています。「少しでも、演出家の意に沿いたい」と、そんな思いで、この舞台に挑んでいます。

——今回、演劇でこの脚本が上演されるのは2回目となりますね。

郷内さん

はい。この脚本は、とても大切だと思っています。被災地の出来事を残すために、続けているのです。私も、それを応援したいと思いました。

——どんなお話ですか？

郷内さん

四世代にわたって、戦争・地震と津波・病気とを体験した、ひとつの家族の物語です。この脚本が書かれた7年前に、今のように世界中が戦争で不安を覚えるようなことになるとは、思わなかっただろうと思います。でも、今、この脚本が、いよいよ、意味を持ってきました。あらためて、そうした世界の流れの中で「3.11」が語られるのです。このお芝居に出演できて幸せに思います。

——「3.11」の風化を、私たちは憂慮しています。でも、私たちも、たとえば「3.10」に行われた東京大空襲を、忘れてしまっている。そうであれば、どうしても、私たちも忘れられてしまうでしょう。逆に、私たちが他の哀しみ・痛みにつながる起点として「3.11」を捉えることができれば、風化への抗い方も、また変わってくると思うのです。

## 清水弘一さん

私は、終戦前に生まれました。4歳で終戦になりました。つまり、私は戦争と一緒に生まれたのです。そんな私でも、戦争の記憶はあるのです。そして、私の記憶をたどりますと、疎開時代・高度成長期・バブル……。そうして現役を引退し、一息しようと思ったら、東日本大震災でした。その後も、ウクライナ戦争、パレスチナの悲劇と続きました。



終戦直後の新宿駅東口

<https://www.edo-tokyo-museum.or.jp/assets/img/2017/02/3.1.jpg>

なんとも長く生きてきたようにも思います。今、私自身の終活の中で「311」が大きな位置を占めていると思います。あのこと・若い人のこと・日本を、考える今日この頃です。何でもいいから、良いものを残したい。大袈裟なことでもなくていい。自分のことを含めて この演劇で、また見つめたい。自分を考える時としたい、と思います。



上 インタビュー風景  
日本基督教団石巻栄光教会で  
お話を伺いました。

左 「ファミリーツリー」が  
公開された名取市文化会館

## 「ファミリーツリー」を観て

初めて観劇した B さん

・・・ネタバレを書いて良いものか、迷っている。

観るの二度目なのよ、

と言っていた後ろの席のおばさま方が最後は号泣していたので、  
そういう楽しみ方もあると信じて書きます。

舞台は、息子 誠一が嫁のさちこを連れて  
初めての里帰りをするシーンから始まる。  
満開の桜の下のお花見だ。

じいちゃん、ばあちゃん、父さん、母さん、親戚の叔父ちゃん、叔母ちゃん、  
小学生の姪っ子、釣り好き大叔父に、いつもの呑み仲間も現れて、楽しい酒盛りだ。

互いの近況、お決まりの「まだ結婚しないのか」の煽りと  
「あいつは、定職についてないのか」の噂話、飽きずに繰り返される思い出話、  
しまいには夫婦喧嘩も。ごくありふれた光景が繰り広げられる。実に微笑ましい日常風景。

しかし、実は、誠一とさちこさん以外は、みな死んでいる。

そうだ、あの津波が、あの時、皆を連れて行ったのだった。

夢でもいい、幽霊でもなんでもいい、  
とにかくみんなに一目会いたいであろう息子の誠一はともかく、  
特筆すべきは岡山から来た嫁 さちこの反応だ。

津波で死んだと聞かされていた親戚一同が目の前で花見をしている状況に、  
一瞬面食らったものの、さちこはすぐに溶け込む。  
こんな事はあり得ない、この人たちは死んだ人たちだ、とは言わない。  
血の繋がりが地元にゆかりもないさちこが、あっという間にみんなに溶け込む。

そこには、岡山と関東の地理的距離もなく、  
死んだ人と生きている人の垣根もない。

芝居の後、日和山に登ってみた。

目には見えないけれど、  
先に逝った人たちも私達と繋がっている。  
そして私達が前に進むのを応援してくれている。

——なんだか、そんな感じがしました。

(了)

# 元「原発強制避難地」を訪ねて

## 大熊町・葛尾村・川内村 訪問

「コロナ」の騒動は、私たちの自由を奪いました。その3年ほどの間に、しかし、世界は止まっていませんでした。福島「強制避難地」には、続々と、人々が戻っているのです。気が付けば「1万6千人」もの人々が、まったく除染できない森林の中に点在する「除染済」の市街地で、新しい生活をしています。しかし、その「除染済」の場所であっても、「震災前であれば避難しなければならない放射線量」の3倍の数値が確認されたり、している。それが現実です。



2023年4月29日 双葉郡浪江町大堀にて。「0.3」になれば、震災前の日本と今の世界のほとんどの場所で、「避難しなければならない」のです。

今、現場はどうなっているのか。数年来会うことができなかった友人を訪ねて、元「原発強制避難地」を訪ねました。

(2024年3月23日 川上直哉 記)

## 2024年2月10日(土)

### 大熊町交流ゾーンの中心に位置する「交流施設・link 大熊」にて

——原発の事故があり、東京電力株式会社の「対応」があり、そして政府・経済団体の動きがありました。そればかりを見て、心を痛めていた私です。今日は、その理不尽の中に生きる方々の声を、みんなで伺います。とても貴重で重要な機会です。私たちが「被災地を覚えて祈り・応援する」という時、その「被災地」が、空想やイメージの中に閉じ込められてしまっている、かもしれないと、危惧するからです。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

木幡さん・飛田さん・木田さん・  
大島さん・高橋さん

よろしくお願いいたします。



——それでは、みなさま、自己紹介から、お願いします。

木幡さん

木幡（こわだ）ますみ、と申します。大熊町の町議会議員をしています。実は、私の父は、特に教会に所属したわけではないようですが、クリスチャンでした。その影響もあって、私は郡山市にある福山キリスト教会に、子どもの頃からずっと通っていたのです。小学校低学年からずっとです。教会には日曜学校があって、人生の話とか、いろいろな話を聞いたことを覚えています。いろいろな苦労がある中で、私は一人ですっと、教会に行っていたのです。中学校は郡山市内のザベリオ学園に通いました。



つまり、私の実家は郡山なのです。「3.11」の後の原発事故があって、その実家の周りは、とても放射線量が高くなってしまいました。

木田さん



木田恵嗣と言います。私も、郡山市に3歳から高校卒業まで住んでいました。家は教会で、木幡さんが通っておられた教会とは、とても良い交流をしていました。そして今は、父が牧師をしていた教会の牧師をしています。木幡さんには、子どもの頃に、お会いしているかもしれませぬ。木幡さんが通っていた教会には、昔、シュナイダー先生がいましたね。その時代から、よく知っています。

木幡さん

シュナイダー先生。宣教師の先生ですね。英語を教えてもらった記憶があります。

木田さん

2011年の発災当時、私は福島市の教会の牧師をしていました。震災後、放射能のことがあり、福島市で子どもの保養プロジェクトをしていました。その頃から「東北ヘルプ」と一緒にやってきました。そして、郡山市内の教会に転任をした後、食品放射能計測所を、その教会の中に設立しました。

木幡さん

10年前の郡山の放射能の高さは、とても印象深く覚えています。でも、国などは「原発事故とは関係ない」という姿勢ばかりを示していた。私が気にしているのは、森林と木材です。放射性物質が降り注いだ森林の木々が伐採され、木材として活用されています。二次被害・三次被害が出ないかと、心配しています。



木田さん

なるほど。そういえば、思い出します。近所の欅の木のことです。その木の周辺の空間放射線量が、とても高かったので、とても心配していました。その欅の木は「売るため」に切られました。しかし、その後に聞いた話では「その欅の木は放射能が高くて売れなかった」ということでした。

木幡さん

そうなのです。「木の樹皮が問題だ」と言われますが、私の考えでは「木の中」の放射線量も、高くなると思うのです。

郡山市のことは、故郷ですから、ずっと気になっています。親しい先生のことを思い出します。2011年に「郡山市にも放射性物質が大量に降り注いでいる」ということに気づいた小学校の先生がいました。それで、自分で放射能を測り始めたのです。子どもたちと保護者からは、とても感謝されていました。でも、周囲からは、大きな反発を買うことになって、具体的に抗議されたそうです。その方は、ずっと臨時教員を続けた後に教諭になったので、組合に入っていなかった。それで、一身に攻撃を受けてしまい、体が疲れて、病気になって、結局、学校の先生を辞めてしまった——そんなこともあったのです。

高橋さん

オンラインから、失礼します。会津若松で教会の牧師をしています高橋拓男と申します。2011年には福島市にいました。そして、そのすぐ後に、会津若松市に牧師として赴任したのでした。

会津には、大熊町からも、たくさんの方々が避難されてきました。私たちも15の仮設住宅にお邪魔して、生活再建のお手伝いをさせていただきました。木幡さんがおられた仮設住宅にも「マッサージ」の支援など、させていただいたことを思い出します。懐かしい思い出です。その時は、本当にお世話になりました。



木幡さん

いえいえ、こちらこそ、本当にお世話になりました。仮設住宅では、支援物資をはじめとして、本当にお世話になりました。そしてまだ、会津には500人くらい、大熊の方々がいるのです。なお、お世話になっています。



2016年、大熊町の方々が多くお住まいになった会津若松市内松長仮設住宅・老人ホームへの「マッサージ支援」(高橋先生撮影)



### 大島さん

福島市の教会の牧師をしている大島博幸と申します。2011年の時は埼玉で牧師をしていました。今、福島市に赴任して6年になります。私たちは「バプテスト」というグループです。全国で300くらいの教会があり、70年前くらいから福島市に教会があったのですが、トラブルがあつて、たいへんな苦労があつて、そして、そこに牧師としてのお招きを頂きました。そうして、みんなと出会い、一緒に活動しています。福島市にも放射能計測所ができて、今、三つの計測所を、みんなでやっています。

私たちは仲間の教会と一緒に「被災地支援委員会」を作って、東日本大震災の被災地支援を続けています。そして最近、岩手・宮城とは別に、福島に特化した全国の支援体制を作りました。全国の支援の中で、情報発信をしようと思っています。首都圏の人々にも実際を見ていただくことを心がけています。今日は勉強させていただきます。

### 木幡さん

原発事故を受けて福島市やいわき市に住むことになった浪江町・双葉町の方々から、聞こえてくる声があります。「自分は仏教徒だけれど、教会に行っている。そうすると、楽になる」という声です。「気持ちが楽に・幸せになった」と。「ケンカしなくなった」と。そう聞いています。実は、年々、原発避難者の間に虐待が増えているという話も聞こえてくるのです。みんな、心の安らぎが、今こそ、本当に必要なのだと思います。

### 大島さん

本当にそうですね。教会は、心の安らぐ場所であるはずですが、苦労があつた私の教会は、8年前にいったん閉鎖になりましたが、今、新しい教会を作ろうと努力しているところです。そして今年5月に、ついに、新しい教会堂が建つ予定です。こころの安らぐ場所になればと願って、努力しています。

### 飛田さん

飛田晋秀（しんしゅう）と申します。木田先生とは、何度もお会いしていますね。川上先生とは10年来のお付き合いです。仙台には「女川原発」の問題に取り組んでいるの方々が多くおられ、講演などで、宮城県にもよく伺います。



私はもともと「職人」を撮るカメラマンをしていました。震災直後、小名浜に行き、この出来事が風化しないように努力するつもりで、現場の写真を撮り続けてきました。とりわけ、住人が避難を余儀なくされた原発被災地に定期的に通い、写真を撮り続けています。その最初の時、たくさんの思いが溢れてしまって、まったくシャッターが切れなかったことを、よく覚えています。何度も怒り、涙を流しました。一つひとつ、よく覚えています。2012年から、もう140回以上、現地に入っています。かなり線量の高い所にも入り続けました。そして、全国で400回以上の写真展をしてきました。

——今日は、飛田さんの写真展があり、そして、今中哲二先生の講演会が、こちら大熊町で行われますね。以前、飛田さんは「福島県内では、原発の強制避難地の写真展をする機会が少ない。写真展を開催しても、メディアはまず、取り上げてくれない」という現状をお話してくださいました。

飛田さん

そうですね。そして今日は「強制避難地」では初めての写真展となりました。今日、本当にたくさんの方が、ここ大熊町の交流施設で開催される写真展に、お越しになっておられます。本当に、力づけられる思いがします。



東北ヘルプ  
ニュースレター  
2022年クリスマス号

巻頭言	1頁
第一部「復興」を回顧し、ネットワークを広げて	2頁
被災被災者支援者ネットワーク	3頁
2022年9月17日に計4回開催された復興支援者ネットワーク「フォーラム」の様子	4-7頁
震災と文化と復興と	8-12頁
「東北マガジン」2022年12月号の目次	13-14頁
第二部「復興」でも、まだ続く	15頁
オンライン「復興フォーラム」	16-23頁
福島市に、新しい住居所を	24頁
献金感謝・会計報告・懇談会	27-30頁



左 大熊町での写真展会場にて 飛田晋秀さん。

右 「ニュースレター2022年クリスマス号」 飛田さんの写真展の様子が、たくさんの写真と共に、紹介されています。インターネットで「東北ヘルプ 2022年クリスマス号」と検索するか、上の QR コードから、または <http://tohokuhelp.com/jp/secretariat/38/221227.pdf#page=1> から、ご覧いただけます。

——今回、私たちは、飛田さんのご紹介で、木幡さんのお話を伺うことができます。本当に感謝しています。今日の準備として、私は二冊の本を読みました。2012年頃のご苦労が詳しく記されていました。木幡さんは、震災前から町議会議員を長く勤めたご夫君が、町長選挙に立候補されたのでしたね。そして敗れた。その原因は「反原発」を訴えたからだ、と、ご著書には記されていました。でも、その後、ますみさんが町議会議員に立候補されるのですが、その時も「反原発」を、はっきりと訴えられたのでした。そして、「二期連続 トップ当選」を果たしておられます。

木幡さん

私は、「反原発」が理由で2012年の町長選挙に負けたと思っていないのです。主人はその時、とても大きな病気をしながら、選挙をしたのです。それで、結果が出なかったのだと思います。



左 木幡ますみ 他『わたしたちのこえをのこします』（2013年）  
右 木幡仁・木幡ますみ『原発立地・大熊町民は訴える』（電子書籍）

——先ほど、ふとすれ違った方と、少しお話をしました。私が「こんなに大きな施設・きれいな建物がたくさん建ってしまうと、反原発とは、言い難いのではないですか」と聞きましたら、「そんなことはない」と、はっきり、おっしゃっておられました。感動しました。

木幡さん

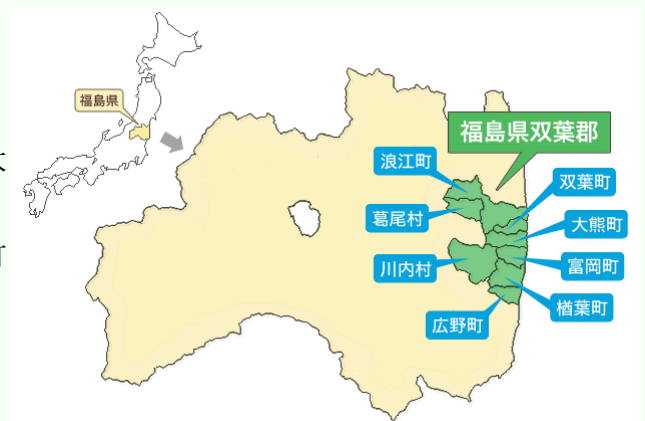
大熊では「原発を頼らないエネルギー・発電を！」と、みんな、言っています。「大熊るるん電力」という取り組みは、町の多くの人々によって、具体的に進展しているのです。



——「大熊るるん電力」という、発電を生業とする株式会社ですね。「福島県大熊町からエネルギー供給の新しい形がはじまります」というキャッチコピーがとても印象的なホームページを拝見しました。

木幡さん

色々、みんなで試行錯誤を続けました。風力、太陽光、バイオマスと、いろいろ、みんなで試して、太陽光が一番有力だ、となりました。それは大熊町だけではありません。双葉郡全体がそうです。



私たちは、原発事故によって、避難を余儀なくされました。今も、「除染」のために、大切な我が家を取り壊されています。「除染解体」というのです。先祖伝来の土地も手放して行かざるを得ない現実があります。そうして「中間貯蔵施設」というものが造られている。

その中で、電気は自分たちで作ろうと、みんなで考えているのです。この雰囲気の中ですら、「原発賛成」という気持ちは、とても薄いのだと思います。みんなで再生可能エネルギーに力を尽くし、それが結集しているのです。みんなで、本当に、がんばっています。そして、素晴らしいことに、行政もまた、そうした方向に一緒に向かっています。これは、繰り返しますが、大熊町だけではありません。たとえば、お隣の双葉町もそうなのです。

くここで、場所を変えて、「iink 大熊」の図書コーナーへ。  
川内村の志田篤さんが、そこに遅れてお越しになりました。>



左から、志田篤さん・大島博幸さん・木田恵嗣さん・飛田晋秀さん

志田さん

川内村に住んでいます。志田篤と言います。私も、村議会議員をしています。今のお話は、大切ですね。1980年代は、私たちも若くて、一所懸命、反原発の運動をしたのです。懐かしい思い出です。でも、震災前、そうした動きは、消えてしまっていた。そして今、また変わった。・・・ただ、運動をする体力がなくなっているけれどけれどね。

——大熊町について、最後に、お話しくださいませんか？

木幡さん

私は都市部である郡山市出身です。結婚して大熊に引っ越してきて、慣れない草むしり等をしていたら、すぐ、「大変でしょう」と助けてくれる人が現れて、何人も声がけしてくれました。本当に、ここはいい場所です。そして、その皆さんと、原発事故に遭い、避難所へ行き、仮設住宅に暮らしました。ずっと、助け合ってきたのです。これから先もずっと助け合いたい、と、私たちは「女性の会」を作って活動を続けています。

大熊町の中で、今、話題になっているのは、やはり、能登の震災被災地です。ニュースでは、「泥棒」が心配で、壊れた家から離れられない被災者がたくさんおられる、と聞いています。それは、とてもよく分かるのです。どうしても、私たちは、家を離れざるを得なかった。その後、何が起こった。本当にたくさん、私たちの家々は、あちこちで、泥棒に入られてしまいました。その悔しさと哀しさを思い出しています。そして、能登の方々の思いが、痛いほどわかる気がしているのです。



左から、木田さん・木幡さん・志田さん・大島さん

そうした痛みを思い出しながらも、今、大熊町は、新しい街づくりをしています。新しいことだらけです。ここに住む子どもたちのことを気にしています。実際、学校の先生も大変なのです。新しい学校だから、新しいことを、次から次へと、たくさん、しなければならない。それで、学校の先生たちの帰宅時間が「夜10時過ぎ」になっています。これでは、先生たちの寝る時間が無くなってしまいます。役場も、学校と同じです。夜遅くまでずっと、電灯がついている。残業が多い。お隣の双葉町でも同じだ、とのこと。これでは、誰でも、精神的におかしくなってしまう。疲れてしまう。そう思って、現場にお話を聞きますと、やっぱり「日曜日はずっと寝ていたい」と言っていました。

——今日は、大切な講演会がありますね。その直前のお時間を頂きました。

貴重なお話を、ありがとうございました。

**2024年3月5日（火）**

## 葛尾村で営業を続けるゲストハウス（民泊施設）ZICCAにて

—今日は、大島先生と一緒に、ここ・葛尾村に参りました。  
大島先生は福島市から自動車でいらっしゃったのですね。

大島さん

はい。だいたい1時間のドライブでした。その途中、「1マイクロ Sv/h」という驚くような数値が、自動車内のガイガーカウンターで計測されました。驚きました。



—自動車の中であれば、3割くらいは、放射線を遮蔽できると聞いたことがあります。  
福島市から葛尾村への山道は、本当に、放射能汚染がひどいのですね。

大島さん

とても心配です。特に、その山林の中で、防護服も特別なマスクもせずに、土木作業に従事する方が、何人もおられました。震災前の日本であれば考えられないような放射線量なのです。何か、とても大きな矛盾が、当たり前に行われている、そんな気がします。

—今日は、私たちが一緒に志田さんにお話を伺います。  
どうぞよろしくお願ひいたします。では、  
改めて、志田さんに、自己紹介をお願いします。

志田さん

志田篤といいます。ここ・葛尾村から南に自動車で30分くらい行った所にある川内村の住民です。NPO法人で、生活再建のための活動を、震災以来ずっと、続けています。「どん底」にも落ちましたが、何とか、今でも続けているのです。



私たちは「葛力創造舎(かつりよくそうぞうしゃ)」が運営する「ZICCA」で、志田さんにお会いしました。ホームページには「葛力創造舎は、通常なら持続不可能と思われるような数百人単位の過疎の集落でも、人々が幸せに暮らしていける経済の仕組みを考え、そのための人材育成を支援する団体です。」と説明がありました。

<https://katsuryoku-s.com/about>

——具体的には、どんな活動をしていますか？

志田さん

フードバンクを、川内村でやっています。そして、キッチンカーを利用して「石焼き芋」や「焼きそば」を売っています。火曜日は、ここ・葛尾村での販売をしているのです。このキッチンカーは、東北ヘルプの理事でもあった金子千嘉世牧師のお世話を頂いたものです。本当に助かっています。

大島さん

金子先生 —— 懐かしいお名前です。

志田さん

本当に、何から何まで、お世話になったのです。特に、仮設住宅に住んでいた時のことは、感謝しきれませんね。



東北ヘルプ理事であった金子先生への追悼文は、「ニュースレター」2018年クリスマス号に掲載されています。

——フードバンク、そして「生活再建」の活動ということですが、やはり、川内村の実際の現場は、困難の中にあるのですね。

志田さん

原発事故を受けて「強制避難」となった市町村の中で、川内村は、一番早く「帰村」を決定しました。そしてたくさんの税金が投入され、復旧作業が進みました。特に道路などはきれいに整備され、「うらやましい」という声も聞こえます。ありがたいことです。

でも、今現在の現実はどうでしょうか。大きな支援に支えられて出来上がった工場の利益率は、決して高くありません。村民有志が始めた「ワイン」のブドウ生産など、奮闘しているものもありますね。でも、川内村全体としては、やっぱり、苦戦している。



右：原発事故後の川内村に通った「新しい道路」  
下：原発事故後の川内村に設置された風力発電機

下：川内村から海を眺めると、東京電力福島第一原子力発電所がはっきりと見えます。  
(2024年2月10日 木田先生 撮影)





今、徐々に村に人は戻ってきています。川内村の人口は、現在、2,217名・世帯数は1,146世帯です。ただ、避難世帯もまだ177世帯あります。このすべてを含めた全体の内の「約550世帯」が、非課税世帯なのです。というのも、そもそも、みなさん、水田耕作を基本に生計を立て、水は地下水をポンプでくみ上げて、食材は自給自足を基本として、暮らしていたのです。その上で、必要な現金収入は「原発での日雇い労働」で得る、というのが、川内村の普通の生活のスタイルでした。その結果として、村民の大半は、国民年金だけで、充分、老後の生活まで賄えたのです。それがつまり、川内村でした。しかしその生活が、原発事故によって、突然、打ち切られました。村民全員が強制避難を余儀なくされて、遠隔地での仮設住宅の暮らしが長くなりました。その結果、もう、農業をかつてのようにできなくなりました。皆さん、農作業を離れて何年も暮らしながら、高齢化したのです。それで、今は田んぼを他人や業者に貸し出して、そこから地代を頂くということになりました。当然、結果として、基幹収入が成り立たなくなりました。

——道路や建物を新しくしても、生活が「復旧」することには、直接つながらないのですね。



左 大島博幸さん・右 志田篤さん  
金子先生を介して寄贈された「キッチンカー」で、志田さんは被災者の生活再建を目指す販売活動を行っています。

志田さん

はい。それでも、生活再建をしなければと、ずっと、努力を続けてきました。東北ヘルプさんや金子千嘉世先生に、ずっと支えていただきました。本当に、感謝しているのです。今は、とにかく少しでも現金収入を増やして、みんなと支え合えるようにしたい。それで、今「にんにく」などの野菜を生産してみようと思っています。とにかく、毎月「数万円」の現金収入しかない老人が多いのです。少しでも潤いがなければ、本当に切ない。

——小規模の農業を、仲間内で始めるのですね。

志田さん

はい。でも、みんな年寄りばかりですからね……。どうしても、人手が足りないのが、悩みです。通常、そうした場合には「ボランティア」を求めるのでしょう。でも、私たちの場合は、「農作業」をする土壌の汚染が心配なので、二の足を踏んでいます。でも、高齢者は日々、老いて行く。どうしようか、思案に暮れています。

——私たちの運営する「放射能計測所」で、川内村の畑の土壌を測ることは、可能かもしれませんが。お役に立てば、本当にうれしく思います。

志田さん

ありがたいなあ。それは、助かります。そうですね。それから、明るい話題もあるように思います。原発事故のあった地域の北側に、「つくば学園都市」のような、大きな研究機関が来るようです。そうしたら、少しは活気が出るかもしれません。ただ、その際も、「放射能」は動かない課題です。本当に、難しい。でも、私たちは生きて行かなければなりません。いつも、ジレンマに向き合っています。

——そのほかに、気になることはありますか？

志田さん

大きなことと言えば、原発事故で強制避難となった各市町村が、それぞれ、必死に生き残りをかけて動いていることは、少し、気になります。つまり、それぞれが統合されずに活動している。それが「共食い」になるような危険を感じているのです。

——大熊では「物流」が課題だと聞きました。

夕方になると、商店に品物がなくなるそうです。

志田さん

そうなんです。「復興途上」ということで、今はみんなが我慢している。でも、それも長く続かないでしょう。今のうちに、それぞれが胸襟を開いて話し合い、譲り合って、力を合わせて行かないと、先がなくなる。物流が滞っているのは、その端的な表れだと思います。

——大熊では、「若い人と一緒に暮らす老人ホーム」という新しい形態が模索されているそうです。異世代同士・個々人同士も、互いにつながりあって、たとえば独り住まいの人々が安心して生きていける可能性を拓ける。そうした努力が求められているのでしょうか。



金子千嘉世さんが仲介されて、日本バプテスト連盟の「キッチンカー」が、志田さんの御活動のために寄贈されました。上記は2015年2月10日の郡山市「ビックパレット」脇 仮設住宅駐車場にて。

このキッチンカーが、今、「物流」に苦勞する原発被災地で、日々、大活躍しています。

志田さん

そうですね。まず考えなければならないのは、「学校」と「老人ホーム」でしょう。でも、実際はきびしい。広域行政圏である「双葉郡」全体で、高校は「たった一つ」になってしまいました。

——「最近、若い人も、なんとなくだけれど、

たくさん亡くなるような気がする。とても、気になっている」と、大熊で聞きました。

志田さん

そうですね。でもね、原発事故前から、原発労働に従事していた人、とりわけ「危険区域」に入って働いていた人は、いろいろな病気に悩まされると、村の中では語られてきました。もちろん、そのことは、医学的には立証されないのだそうですが。

——震災と被災後の経験は、過去の経験とつながるのですね。

そして、未来の災害にも、大きな教訓になるはずです。

志田さん

そうですね。たとえば「能登」の震災を見ていて、私は危機感を覚えています。

私たちは「ピックパレットふくしま」という巨大施設に避難しました。そこには「3,000人規模」の避難所ができました。でも、「福島県全域が、放射能汚染で危険である」ということで、まったく物資が来なかった。ボランティアは、命がけで来てくれましたがね。それで、本当に食事に困ったのです。「飢えるな」と思いました。今回「能登震災」の中で「ボランティアは、危険だから、行かないように」という声が聞こえました。「渋滞するから」「邪魔になるから」と。そうした場合に、どんな危険なことになるか。現場での経験は、危機感を覚えさせるのです。



——志田さんたちの避難所は、どうなったのですか。

<https://xtech.nikkei.com/kn/article/building/news/20110608/547909/>

志田さん

あの時は、ひどかった。一週間、物資が入ってこなかった。最低限の食品と飲料はあったのですが、これでは大変だ、と恐怖しました。その時、避難所の責任者は、批判・非難を覚悟して、全国に支援を求めたのです。すると、どんどん支援が来ました。そして、それを「記録しないで」どんどん配った。そうすることで、支援は支援を呼んだのです。もちろん、そ

こには批判されるべき事柄もあったと思います。でも、その批判を引き受ける人がいて、人は助かるのですね。「渋滞になる」「揉め事になる」と恐れていたら、支援は動かなくなり、人は助からない。そういうことを、私たちは学びました。

——あれから13年経ちます。

「ジレンマ」の中で、被災した皆さんが、試行錯誤しながら今日を暮らしますね。

志田さん

そうなのです。そして、いろいろ、分かってきています。体感的なことですが、「風評被害」のことも、ずいぶん、考えさせられました。今、「どんなに言っても、何を言っても、絶対に放射能を忌避する」という人は、全体の3割くらい、いつもいるということ、実感しています。このことを前提に、「残り7割」のみんなが、自分で考えて・自分で決められるようであれば、と思っています。正解は、無いということです。

たとえば、キノコで「1万ベクレル/kgを超えるもの」が、去年、あったのです。これが現実です。ですから、10人中3人は「絶対、ここのものは食べない」と言う。それも分かるのですね。でも、「そうも言っていられない」という人が7割もいる。「風評被害」というが、まず、そういう現実からスタートして、その実態をよく見て、考えなければならない。そうした中で、私たちは実際に生活しているのです。

——本当にそうですね。「実態をよく見る」ということ。皆さんのお話をよく聞く、ということ。すべてはそこから始まるはずなのに、それが忘れられていると思います。自戒します。今日は、本当にありがとうございました。



最後に「キッチンカー」の中を見せて頂きました。この日は「やきそば」「たいやき」「やきとり」を販売していました。

「とても使いやすい、素晴らしいキッチンカーです。保健所も太鼓判を押していました。大切に、使っています。」

と、志田さんがお話してくださいました。



## 能登支援活動報告

地域支援ネット「架け橋」中澤竜生・中澤佳子  
(基督聖協団 仙台宣教センター)

### 能登震災の発生

2024年1月1日に発生した能登地震は、大きな衝撃を与えました。倒壊した家、道路を塞ぐ土砂災害、隆起した土地に傾いた家。2011年以来、毎年のように、こうした災害の場面がテレビに映し出されます。しかし、今回は「1月1日」であり、特に大きな衝撃を与えたようです。

私たちは1月12日に南三陸町の社会福祉協議会の拠点「結の里」へと向かいました。イベントが行われており、能登に向けてメッセージを送るために住民から多くのメッセージが集められていました。社協の方々は能登に行きたいと希望しており、そのための準備と提案を行政に提出していたようです。復興住宅地を訪れますと、自治会長は心配そうな表情で能登の地震を話題にしました。私は能登を視察し、皆様に報告する必要があると考えました。そして「能登にいつ行きますか」といった問い合わせがありました。その後「社協が能登に行く」と決定しました。私は迷いなく、私たちの団体「地域支援ネット『架け橋』」を主体として、能登への視察を行うことにしました。

### 能登支援視察活動（アセスメント）

私たちの決断を、NPO法人「東北ヘルプ」や日本基督教団石巻栄光教会など、いくつもの団体・教会・個人のみなさまが支援してくださいました。改めて、感謝します。



1月29日から2月1日まで、私は能登へ赴き、視察と支援活動を行いました。能登半島への訪問は初めてでした。視察は重要な意味を持ちました。熊本震災の支援の際、私は東北ヘルプの川上先生と一緒に内灘聖書教会に泊めていただいたことがあります。今回も内灘聖書協会が拠点となっていました。「能登ヘルプ」「全き災」「救世軍」「オペレーション・ブレスリング・ジャパン」の方々と会うことができました。



その後、七尾にある倉庫を視察し、周辺の施設で物資の配布を手伝いました。翌日、能登半島地震の震源地である珠洲市を目指しましたが、手前の能登町で断念せざるを得ませんでした。地域住民からの情報を収集して東北へ戻りました。

### 被災地の状況

震災によって道路などの交通手段が限られており、不便さはあるものの、各市に向かうためのボランティア専用バスが運行されていました。行政による人数制限も設けられていますが、ボランティアを含めた炊き出し支援が常に求められていました。様々な施設において炊き出しや弁当の提供が続けられていました。寒暖差もあり、体調管理が心配される中、コロナ感染や風邪などの症状も見られ、懸念されました。地元の方々の焦りや不安がはっきりと確認されました。一刻も早い復旧が願われています。他方、行政側も、被災者としての疲弊が目立つと感じられました。



能登の特殊な地形のために復旧・復興に時間がかかると感じました。地元の住民も同様に感じており、今後のことを考え、不安が一層強まっています。再び同様の災害が起こる恐れから、一部の人は住み慣れた土地を離れることを考えています。

高齢社会がさらに進む可能性があります。地震前から問題となっていた過疎化が、今回の地震でさらに進む可能性が出てきました。さらに若者が離れるかもしれません。一方、「二次避難所」が設置され運営されている金沢市街では、日常の風景がそのまま展開しています。能登市との差に困惑しました。災害の不安を感じる場所から、例えば金沢市内に子どもが避難した場合、その親たちは、安全性が確保されるまで、被災地・能登に子どもを戻すことは難しいのではないかと想像されました。

能登に住む人々が東日本の被災地を訪れ、過疎地や安全性について懸念された場所が復興している様子を見学し、その経験を生かしていただけると、切に願いつつ、具体的な支援の準備を進めたことでした。

## 具体的な支援へ

### 2月21日（水）

支援物資を積んだ自動車で仙台を出発し、金沢市内のホテルに到着しました。金沢でチームを結成しました。今回のチーム名は「ケア・プロジェクト」です。このチームは「惨事ストレスマネジメント」を一年以上学び続けている七人のメンバーで構成されています。

私たちが宿泊したホテルは「二次避難所」となっていました。ここに避難されている方々のために、夕食のお弁当が用意され配布されていました。「二次避難所」には、課題があります。それは距離です。被災地に最も近い場所でも、一時間ほど離れているのです。高齢者はなかなか自宅の様子などを知ることができない状況にあります。「二次避難所」に入ることができて、ほっとして、一時は心身共に休まるかもしれませんが、しかし、そこにおられる方々の表情から、将来に不安を感じていることが伝わってきました。



### 2月22日（木）

トラックの荷台に物資を積み、集合場所となる珠洲市社会福祉協議会の拠点である「健康増進センター」に向かいました。金沢市内から二時間半かかり、道路が崩壊する箇所などを注意深く通りながら到着し、トラックをそこに置いて金沢市内に戻りました。



### 2月23日（金）

午前5時30分にホテルを出発し、午前9時30分から珠洲市にある三崎中学校避難所での活動が始まりました。炊き出しのメニューは「蛸ご飯」と「たら汁」です。待ち時間にはカフェを提供しました。避難所の住民から加えて、周辺地域の住民合わせて総勢150食以上を提供しました。その後、現地活動を終えて次の場所へ移動。夕食の炊き出しは、珠洲市正院小学校の避難所と仮設住宅で行いました。瓦礫撤去を行った南三陸町の男性と共に、「キーマカレー」と「たら汁」を提供しました。被災者の方々とのお話を通じて現状を確認しました。南三陸町から来られた方々は大型バスで宿泊します。



### 2月24日（土）

午前5時30分にホテルを出発しました。珠洲市にある蛸島小学校避難所では、仙台名物の「油麩」「切り昆布」「かまぼこ」を載せたうどんと「蛸ご飯」を提供しました。手作りのスイーツやコーヒーも楽しんでいただきました。雪の中でしたが、地元の方々と交流し、感謝の気持ちを伝えることができました。

南三陸町社会福祉協議会のみなさまは、その夜は能登で一泊し、翌日に南三陸町への帰路につき、夕方到着したそうです。基本的に、車中泊であった様子です。本当に、素晴らしいお働きでした。



(7)

# 会計報告

2023年度				2022年度			
	献金件数	献金額	支出金額		献金件数	献金額	支出金額
4月	39	478,339	685,446	4月決算	62	1,386,871	526,129
5月	25	576,389	653,840	5月決算	6	642,225	652,120
6月	18	648,782	707,291	6月決算	14	282,749	398,923
7月	9	144,630	625,156	7月決算	12	142,500	462,672
8月	15	138,413	283,208	8月決算	19	125,547	347,602
9月概算	44	645,660	558,798	9月決算	39	549,744	567,720
10月概算	22	400,720	294,049	10月決算	17	130,800	613,584
11月概算	15	191,000	279,731	11月決算	21	500,000	245,890
12月概算	110	924,000	452,639	12月決算	122	1,244,187	764,751
1月概算	42	475,800	1,063,909	1月決算	60	435,878	476,036
2月概算	39	467,743	361,136	2月決算	43	409,844	620,504
3/5まで	2	6,000		3月決算	72	723,340	1,342,622
合計	380	5,097,476	5,965,203	事業復活支援金		1,000,000	
前年同月比	122%	102%	130%	合計	415	7,573,685	7,018,553
進捗率				2023年 3月5日現在の資産			
日数		収入 (献金のみ)	支出	通帳1	¥138,328		
92%		102%	119%	通帳2	¥304,956	※これは ランドセル献金	
		(500万円の予算対比)		郵貯口座	¥2,951		
現在の未払い		0円		振込口座	¥466,813	実際の所持金	
1月までに 支払済	計測所	356,250円		合計	¥913,048		¥608,092
	能登支援	100,000円		2024年3月5日開催の「東北ヘルプ」理事会資料。「月額約25万円」での活動が、ようやく定着してきたことを報告しています。			
	川上借受	212,000円					
	自動車修理	217,911円					
	合計	886,161円					

2024年1月25日(木)16時から、オンラインで、一つの会合が開かれ、私と東北ヘルプの理事数名が参加しました。「能登」の支援のための、はじめての全国的な会議でした。その会議の最後に、「能登ヘルプ」というお名前ですべての支援活動を進めたい旨、石川県の教会のみなさまから、提案が出されました。「息長い、教会らしい活動をしたい」というお声と共に、その案は提示されたのでした。

私たち「東北ヘルプ」は、14年目の活動を始めています。本当に「息の長い」活動となりました。その「息の長さ」の中で、

貧しさも富も私に与えず、ただ、  
私に定められた分の食物で、  
私を養ってください。

という「箴言」の言葉(30章8節)は、まさに、私たちの祈りの言葉となりました。

2011年3月18日の発足以来、私たちの財務は急拡大し、徐々にひたすら縮小しました。「献金は祈りである」「震災の結果、豊かにもならず・貧しくもならない」「1円を100万円のように・100万円を1円のように、拝受し・活用する」等々、現場で学んだことは、数知れません。多くの方々が、私たちの祈りをご自分の祈りとしてくださった。その賜物は、今、確かにここにあります。

この1年は、財務の最小化を目指す「仕上げ」の年となりました。「年間500万円」の予算を目指しましたが、放射能計測所の追加工事や自動車修理等、不測の事態には対応できず、一時「未払い」が生じました。これは13年間で初めてのことでした。しかし、守られました。「財務的に最小規模での・しかしなお最大限の活動」は、この半年で、おおむね「板についた」と思います。お祈りを、深く感謝しています。(2023年3月25日川上記)



## 支援金・献金の受付口座

### 【郵便振替】

02290-8-136273

特定非営利活動法人

被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

### 【他金融機関からの振込口座】

ゆうちょ銀行 二二九店

当座預金 0136273

発行責任 NPO 法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

代 表 川上直哉（日本基督教団石巻栄光教会主任担任教師・

食品放射能計測プロジェクト 共同運営委員会委員長）

理事 吉田隆（日本キリスト改革派甲子園教会牧師・神戸改革派神学校校長）

理事 田中武司（保守バプテスト同盟西多賀聖書バプテスト教会員・財務担当）

理事 中澤竜生（基督聖協団仙台宣教センター国内宣教師）

理事 秋山善久（日本同盟基督教団仙台のぞみ教会牧師・NPO 法人 セミナーレ理事）

理事 阿部頌栄（日本ナザレン教団仙台富沢教会牧師・仙台食品放射能計測所長代行）

理事 木田恵嗣（ミッション東北 郡山キリスト福音教会牧師）

理事 大島博幸（日本バプテスト連盟福島主のあしあとキリスト教会牧師）

理事 李貞妊（元「東北ヘルプ」職員）

監事 本村大輔（救世軍西日本連隊長）

小河義伸（八王子めじろ台バプテスト教会牧師）

※肩書等は全て 2023 年 8 月現在

Sendai Christian Alliance Disaster Relief Network

# Touhoku HELP



Per crucem ad lucem（十字架を渡って光へ）

〒980-0012 宮城県仙台市青葉区錦町 1-13-6

TEL/FAX. 022-263-0520 URL : <http://tohokuhelp.com> MAIL : [sendai@tohokuhelp.com](mailto:sendai@tohokuhelp.com)

携帯電話 090-1373-3652